

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：32710

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24820058

研究課題名(和文) 享保期の江戸俳壇の研究 沾徳・沾洲・不角を中心に

研究課題名(英文) A Study of the Haikai Circles in Edo during the Kyoho Era: With a focus on Sentoku, Senshu and Fukaku

研究代表者

牧 藍子(Maki, Aiko)

鶴見大学・文学部・講師

研究者番号：20633788

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：元禄期に江戸で活躍した不角ら前句付派や沾徳・沾洲ら非蕉門の俳諧師たちが、享保期に展開した多様な俳諧活動のあり方的一端を具体的に提示した。不角に関しては、享保期の月次興行について学会発表を行い、論文にまとめた。また、享保期に不角の息子不ケイ・寿角らによって刊行された俳書を調査し、不角が一家を挙げて自らの築いた地盤の維持に努めたことを明らかにした。沾徳・沾洲については、主として点巻・点帖類を調査し、特に露沾周辺の江戸の俳諧師の動向と合わせて分析をすすめた。

研究成果の概要(英文)：I described the various aspects of activity by Haikaishi in Kyoho era such as Sentoku, Senshu and Fukaku, who didn't belong to the school of Basho. Fukaku collected works of his followers twice a month in order to extend his influence in Kyoho era, and his sons, Fukei and Jukaku, maintained the ir father's achievement by publishing books on Haikai, too. Concerning Sentoku and Senshu, I investigated some handwriting materials that left the mark of their corrections, and advanced analysis of the trend in the Haikai Circles in Edo, focusing on the movement of the Haikaishi surrounding Rosen, whose father was v ery famous as Haikai Daimyo.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：国文学 俳諧

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまでの研究において、蕉風における其角の俳風の特殊性、当流俳諧師とその周辺の作者たちの俳風、そして調和・不角を中心とする江戸前句付派の活動の意義について明らかにし、元禄期の江戸俳壇の具体相を提示した。蕉風を中心に語られてきた元禄俳諧であるが、一口に蕉風といってもその俳風は必ずしも均一ではなかった。広く元禄俳壇全体を見渡せば、雑俳を含めて、享受者のレベルに応じてさまざまな俳諧活動が展開されているのが実態であった。

芭蕉の死によって、その中核を失った蕉門は分裂し、其角と非蕉門の沾徳一派による、いわゆる「洒落風」が江戸俳壇を席卷した。そして其角没後の江戸俳壇においては、沾徳・沾洲一派が、引き続き中心的な勢力となる。一方、元禄期には主として前句付投句者層を相手に俳諧活動を行っていた調和・不角らも、江戸前句付派の本格的な雑俳化を前に前句付から手を引き、芭蕉・其角没後の江戸俳壇への復帰を狙っていた。沾涼著『鳥山彦』（享保二十一年）に述べられた、其角・沾徳ら都市俳諧の流れを汲む一派と調和・不角ら貞門系前句付派の対立は、享保俳壇の一つの見取り図として有効であると考えられ、今後の研究においても両者の俳風や俳諧活動の相違に注目していく必要がある。

宝永から享保にかけての江戸俳壇は混沌とした状態が続いており、研究も非常に手薄である。そこで、沾徳・沾洲・不角の俳諧活動に焦点を当て、彼らが享保期にどのような俳諧活動を展開しているか、調査を試みた。

## 2. 研究の目的

享保期の江戸俳壇を理解するためには、沾徳の「洒落風」、沾徳の跡を継いだ沾洲の「比喻俳諧」、そして調和・不角ら前句付派の「化鳥風」について、その俳風の特徴を明確化することが不可欠である。

沾徳・沾洲・不角は、いずれも宗匠として門人の作に点を掛けて謝礼をもらう点業を行っている。そして点者の俳風は、点者自身の嗜好を反映したものであると同時に、その俳諧の享受者層の性格と密接に関連している。従来の研究は、沾徳・沾洲・不角ら自身の作を個別に取り上げたものであるが、彼らの俳風について知るためには、彼らの俳諧の享受者たちの作風についても考察の対象とする必要がある。個々俳諧師の創作活動だけでなく、彼らの俳諧活動全般を視野に入れ、当時の江戸俳壇を支えていた庶民作者層の動向に注意することによって、享保期の江戸俳壇の実態をより一層正しく把握することが可能となろう。

そこで本研究においては、享保期の江戸庶民の生活に俳諧がどのような形で存在し、どのように楽しまれていたかという、その享受

の一端を明らかにすることを最終的な目的とする。

## 3. 研究の方法

沾徳・沾洲・不角らの俳風と、彼らの俳諧を享受した作者たちの俳風の双方を知る必要から、彼ら自身の作品を含む俳諧撰集と、彼らが批点・評語を施した点巻・点帖類を並行して検索・収集する。そして、まず点巻・点帖類を材料に高点句の傾向を把握した上で、個々の点者の作について分析を行う。また資料収集の際に、彼らが序跋を与えるなどして関与した俳書についても網羅的に調査し、交友関係や勢力地盤を整理する。以上の調査結果をふまえ、享保期の江戸雑俳界の動向を視野に入れつつ、沾徳の「洒落風」、沾洲の「比喻俳諧」、不角の「化鳥風」といった点者の俳風の特徴と、その俳諧の享受者層や俳壇経営の方法との関連性について検討を行う。

(1)まず、沾徳・沾洲・不角らの門弟たちの作風を、高点句の特徴に注目して把握する。彼らの門弟は、必ずしも力量のある作者ばかりではなく、またその実力の差も大きい。点者が高点を掛けた句は、作者側の自信作であると同時に点者の好む句でもある場合が多いと考えられる。

具体的には、句作りの仕方や使用語彙等に注目して俳風の分析を行うが、享保期の俳諧は解釈が非常に困難であることが予想される。そのため、沾徳・沾洲・不角の俳論についても同時に調査を行う。沾徳には『文蓬菜』『沾徳随筆』といった俳論書があり、沾洲に関しては沾涼著『鳥山彦』に載る「比喻俳諧」批判が、また不角の場合には、高点句集『夔纒輪』などにその俳論が語られる。

なお、点巻等の一次資料に関しては、語句の訂正や評の内容、高点句の割合などに表れた点者の点業に対する姿勢についても調査する必要がある。これにより、点者と作者との関係性をより明確にできるものと考えられる。

(2)沾徳・沾洲・不角らの高点句の傾向を分析しつつ、それをふまえて個々の点者の俳風の検討を行う。まず『関東俳諧叢書』に収められた「関東俳諧年表」、白石梯三氏の「沾徳年譜考証」、安田吉人氏の「立羽不角年譜稿」を手がかりに、彼らの周辺で刊行された俳諧撰集を収集・調査する。年譜の存在しない沾洲に関しては、網羅的な俳書の調査が必要となることが予想され、また不角についても、原本未確認とされる資料が多くあるため、積極的に実地調査を行い、新資料の検索・発見に努める。以上の資料について分析を行い、高点句の傾向と合わせて、沾徳の「洒落風」、沾洲の「比喻俳諧」、不角の「化鳥風」の性格をつかむ。

(3)最後に調査のまとめとして、沾徳・沾洲・不角らの交友関係や、俳壇経営の方法、勢力地盤等を整理し、彼らの俳風と、その俳諧の享受者層の性格との関連性について考察する。

ここで特に注目したいのが、不角の俳諧の享受者層である。不角は江戸在住で、歳旦帳にも江戸の作者の名が見えるものの、元禄期を通じて地方に勢力地盤を築いている。不角の俳風の特徴が、こうした不角独自の俳壇経営の方法とどのように関係しているかを明らかにすることで、俳諧という文芸的営みを、近世庶民の現実生活の上にとらえていくことが可能となる。

#### 4. 研究成果

俳諧は、江戸時代を通じて、娯楽や社交の具としての存在意義が非常に大きく、作品の文学性・芸術性がそのままその価値につながっているわけではない。しかし従来の研究は、俳諧の文芸的な高みを見極めることに向かう傾向にあり、芭蕉没後に蕉門が分裂の道をたどり、其角が「洒落風」と呼ばれる異風に傾き出してからの江戸俳壇の研究は非常に立ち遅れている。今後は、文学的・芸術的価値を基準にしてははかることのできない俳諧の意義について明確にしていく必要があり、本研究の有意性もその点にある。

(1) 上記の課題と密接に関わる論文として「不角の前句付興行の変遷とその意義」(『国文学叢録 論考と資料』2014年)「享保期の不角の月次興行の性格」(『国語と国文学』2013年9月)を発表した。不角は元禄期の競技性の強い前句付興行・月次発句興行から、富裕な地方作者層を主たる相手とした月次興行へと活動方針を転換している。一方、元禄期と享保期の月次俳諧の作風はいずれも通俗的かつ平明であり、俳風の面においてこの間の不角の俳諧に質的な断絶を認めることはできない。不角の俳壇経営における方針転換は、不角の俳諧の享受者層の変化と連動しており、享保期の不角の俳諧活動の多様性は、その享受者層の動向を反映していた。

(2)享保期の江戸俳壇における非蕉門の俳諧師たちの活動に着目した本研究は、沾徳・沾洲・不角という俳諧史の点の研究ではあるが、享保という空白の時代を埋めるとともに、蕉風を中心とする江戸俳壇の研究を相対化する意義を持つ。今回の調査においては、特に沾洲と不角について新資料の搜索に務め、その結果、従来未紹介であった享保期の不角の月次句集一点を閲覧することができ、また新出の享保期の不角歳旦帖五点を入手することができた。これらの資料によって、不角の享保期の俳諧活動を支えた有力門人や、享保期の月次興行の実態について強い裏付けが得られた。

また不角は、俳諧師として活動するかたわら書肆を営んでもおり、息子の不扁・寿角も俳諧師として独立するなど、一家を挙げて俳書を刊行し、俳壇経営を行っている点が特徴的である。そこで不角に加え、不扁・寿角の板行した歳旦帖を合わせて調査した結果、それらが不角歳旦帖の体裁を踏襲しており、不角の有力門人が彼らを後援していることが判明した。享保期の不角関係俳書からは、不角が家族ぐるみで俳壇経営を行うことで、前句付興行を通じて築いた地盤の維持と拡大をはかったこともうかがえ、その俳諧活動の独自性と多様性が一層明確となった。また新出の元文六年寿角歳旦帖からは、不角の家族構成について情報を得ることができた。

不角に関しては、今後も新資料の発見が期待されるので、享保期以降の活動や不扁・寿角の活動をも視野に入れて、引き続き調査をすすめていく。

(3)本研究の方法の特質の一つは、個々の俳諧師の創作活動にとどまらず、彼らの俳諧活動を支えた作者たちの動向に注目することによって、江戸俳壇の実態を把握しようとする点にある。このような観点から、作品集として刊行された俳書に加え、沾徳・沾洲が批点や評語を施した点巻・点帖類といった一次資料の収集・調査を重点的に行った。点巻・点帖は、高点句の傾向を知るのに有効であるだけでなく、彼らの交友関係についても示唆を与えてくれるものであるとの見通しであった。しかし、句意の難解さ、付合の分析の難しさの問題もあり、「洒落風」「比喻俳諧」と称される沾徳・沾洲個々の俳風の特徴を具体的に抽出するには至らなかった。今後の課題としたい。特に、沾徳・沾洲の俳諧活動において重要な位置を占めている露沾の俳事に関する資料の分析は、非常に重要な意味をもつと考えられる。このたびの調査結果をもとに、沾徳・沾洲らの点業に対する姿勢を明かにし、不角らの事例とも比較しながら、点者と作者との関係性についてより具体的に解明していきたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

牧 藍子、享保期の不角の月次興行の性格、国語と国文学、査読有、第90巻第9号、2013、pp.21-35

〔学会発表〕(計 1 件)

牧 藍子、享保期の不角の月次興行の性格、俳文学会、2012年10月7日、山口大学大学会館

〔図書〕(計 1 件)

新沢 典子、高田 信敬、岩佐 美代子、

今野 鈴代、中川 博夫、山西 明、牧 藍子、佐藤 かつら、片山 倫太郎、田中 智幸、久保木 秀夫、平藤 幸、石澤 一志、堀川 貴司、伊倉 史人、深沢 了子、芝野美奈代、笠間書院、国文学叢録 論考と資料、2014、pp.128-147

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

牧 藍子 (Maki Aiko)  
鶴見大学・文学部・講師  
研究者番号：20633788